

【取扱い厳重注意】

平成24年3月5日

聴取結果書

東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証委員会事務局

局員 三田 浩平

平成24年3月5日、東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証のため、関係者から聴取した結果は、下記のとおりである。

記

第1 被聴取者、聴取日時、聴取場所、聴取者等

1 被聴取者

いわき光洋高等学校校長 田代 公啓

2 聴取日時

平成24年3月2日午後1時00分から同日午後2時50分まで

3 聴取場所

福島県自治会館3階応接室

4 聴取者

三田主査

5 ICレコーダーによる録音の有無等

あり

なし

第2 聴取内容

双葉病院患者の避難について

別紙のとおり

第3 特記事項

平成24年3月7日、二重下線部分につき、電話聴取により確認。

平成24年3月9日、波線部分につき、電話聴取により確認。

【取扱い厳重注意】

別紙

1 被聴取者の身分

私、田代公啓は、原発事故発生当時、福島県いわき光洋高等学校（以下「光洋高校」という。）に学校長として勤務していた者である。

2 光洋高校が避難所となった経緯

3月11日、光洋高校の選抜入学試験に関する会議中に発災し、会議は中止となり、私は、吉田強栄教頭と鈴木俊明事務長だけ残して、他の職員は全て帰宅させた。同校の近所の小・中学校は、震災の際の避難所に指定されているが、同校は避難所には指定されていない。私は、吉田教頭と鈴木事務長とともに、校舎が地震により被害を受けていないか確認したところ、殆ど被害はなかった。その後、同日17時頃に、近所（いわき市平地区）の保育所の先生と児童が避難して来たが、20時頃には児童は全員無事親に引き取られたため、私は、南相馬市小高区の自宅に帰宅し、吉田教頭も鈴木事務長も帰宅した。自宅は、津波は免れたものの、目茶目茶になっていた。

翌12日8時頃、私は自宅の片付けをしていたところ、鈴木事務長から私の携帯に電話があり、光洋高校を避難所に指定させて欲しいと福島県いわき地方振興局の職員から申出があった旨連絡があったので、私は、鈴木事務長に、承知すると返答するよう指示をした。その当時、自宅は停電しており、情報源はラジオだけで、東京にいる子供達から、テレビで原発が大変なことになっていると報道されているので逃げろというメールが来ていたが、ラジオでは原発情報はほとんどなかったため、私は、避難しなかった。

同日13時頃、鈴木事務長から、正式に光洋高校を避難所に指定する旨の連絡が来たので、私は光洋高校へ車で向かった。

同日18時頃、光洋高校につき、先に着いていた吉田教頭と鈴木事務長とともに、体育館に、ブルーシートや畳を敷き、ジェットストーブを数台たいたが、それ以外の食料や毛布などの物資は全くなく、避難所といっても、一時凌ぎできる場であるくらいだった。同日夜頃、檜葉町からの避難者12名がバスで来たが、翌13日午前頃には、檜葉町消防団が来て、その12名を他の檜葉町民が避難している避難所に連れていった。その日は、私と教頭、鈴木事務長は光洋高校に泊まった。

3 双葉病院等の避難について

翌14日、朝8時頃、福島県学校経営支援課阿部正春主任管理主事（以下「阿部主任」という。）から光洋高校に電話があり、双葉病院とドーヴィル双葉（以下「双葉病院等」という。）の患者を受け入れてくれないかと依頼されたが、患者の受入れには医療体制が必要であり、毛布も暖房用の灯油も少なくなってきたので、私は、最初断った。

しかし、直ぐに阿部主任から再度電話があり、また患者を受け入れて欲しいというので、私は、県の調整も混乱しているであろうということを慮り、「医療スタッフ、毛布、布団、食料を用意して、光洋高校に送ってくれるのであれば受入れるが、それも一晩二晩だ。」と返答したところ、阿部主任からは、医療スタッフや物資等を準備する旨の話があった。

【取扱い厳重注意】

なお、この後、光洋高校と県災対本部との連絡関係について、私は、県障害福祉課菅野主査と連絡をとったこともあったが、双葉病院等の患者の避難については、ほとんど阿部主任と連絡をとっていた。今ここでお話しする、阿部主任との電話連絡については、本聴取の前に阿部主任と話して喚起した私の記憶に基づくものであり、正確なメモ等はない。

同日9時頃、阿部主任から電話があり、「今、双葉病院患者の搬送を開始したので、10時か11時頃にはそちらに着く。」旨話があった。(被聴取者に対して、警察庁、消防庁、厚生労働省、防衛省作成資料に基づくと、「14日10時30分頃、12旅団輸送支援隊がドーヴィル双葉から98名、双葉病院から30名の患者等を搬送開始」旨及び「同日12時頃、12旅団輸送支援隊が相双保健福祉事務所に到着するも、受入れできないとの回答があり、その後、順次いわき光洋高校、いわき開成病院に輸送を依頼され実施したが、いずれも受け入れてもらえず」旨記載があると説明したところ、)同日9時頃の電話では、阿部主任からは、相双保健福祉事務所に寄っていることなど聞いておらず、一度受入れを断ったのは、14日8時頃の電話のことであり、同日9時の電話では受け入れる旨返答している。実際の避難バスの動きは、ご説明を受けた警察庁等の資料の方が正しいと思う。今思えば、県庁も情報が錯綜していたのではないか。その時には、阿部主任からは、バス数台で、双葉病院等の患者が128名来るとは聞いていたが、阿部主任には医療体制がない旨話をしてあるし、患者の容態など特に知らされていなかったの、私は、精神科にかかっているだけで体は健康な患者が来るのだと思っており、後にあんなに症状の重い患者が半日間かけてバスで避難してくることになるとは全く思っていなかった。さらに、私は、相双保健所とは連絡を取っておらず、4名を相双保健所で下したことなど知らなかった。その後、私は、学校のテレビで、福島原発3号機が爆発した旨の報道を聞いたので、避難に幾分支障が出るのではないかと思った。同日13時半頃、バスが来ないので、私は、阿部主任に電話したところ、バスはとっくにもう出ているはずなので、そろそろ着くだろうという旨の話があった。どうやら、福島県庁は、双葉病院等の患者を乗せて避難しているバスとが連絡が取れていないようで、バスがその時どこにいるか、菅野主任に聞いても分からないとの回答があり、どのようなルートを通ってくるかといったことも分からなかった。

同日14時頃、いわき開成病院 [] が光洋高校に来て、確か、「双葉病院とドーヴィルの患者は県立医大病院（福島県立医科大学病院）に避難させてもらうことになったが、避難しているバスと連絡が取れないので、私が光洋高校に来て、バスが来たら県立医大に向かうよう伝えるよう、県障害福祉課の菅野さん（以下、「菅野主査」という。）から依頼された。」旨聞いたと思う。その時、県立会津病院や会津西病院の名前も挙がっていたような気がするが、正確には覚えていない。

また、私は、 [] から、いわき開成病院は、12日に双葉病院からにベッド数の倍以上の患者を受け入れているので、これ以上患者を受け入れることができない旨の話聞いた。

しかし、しばらく待ってもバスは来なかったので、同日16時頃、 [] はいわき開成病院に帰って行った。

その後、私は、阿部主任や、学校経営支援課佐藤主幹等とも連絡を取ったが、バスが

【取扱い厳重注意】

今どのような状況なのかは全く分からなかった。

同日20時頃、ようやくバス8台（1台はマイクロバス）が光洋高校に着いた。バスの中に入ると、バスには異臭が漂い、床に転げ落ちている方、毛布にくるまり全く動かない方、オムツが外れ、糞尿垂れ流しになっている方・・・患者達の様子は言葉で表せないくらい凄惨な状況だった。私は、その時初めて、避難してきた患者がどれだけ重篤な患者だったのかを知った。どうやら、搬送してきた自衛隊には医官はいないようで、それどころか、病院関係者もおらず、避難患者リストすらなかった。私は、病院関係者が一人もついてきていないことに、大変な怒りを覚えた。バスが到着する少し前にいわき開成病院から再度来ていた■■■■が、双葉病院等の患者を乗せたバスに同乗して来た自衛隊の隊長と■■■■に対して、■■■■が菅野主査から県立医大に向かうよう伝えて欲しい旨依頼された経緯や、いわき開成病院は廊下まで患者で溢れているのでこれ以上患者を受け入れられないことを説明し、県立医大に向かって欲しい旨依頼しており、私はその傍らでその会話を聞いていた。私は、■■■■が必死にお願いしているのに、■■■■はずっと、「相双保健所長に騙された。私は、道案内をお願いされただけなのに。」と、患者を無視した発言をし続けていたので、私は、最初は我慢していたが、あまりに腹が立ち、■■■■に対して「後で然るべき者が責任をとるんだから、今は、目の前の状況についてどう対処するか考えることが大事だろう。あんた、公務員だろう。」と叱りつけた。それでも、まだ態度を改めないで、■■■■は、隊長からも「黙ってる。」と怒鳴られ、ようやく黙った。私は、この人はダメだと思った。その後しばらく、■■■■は、「このままここにおいても、患者が死んでしまう。」と隊長に対して必死に食い下がっていたが、隊長は、「上官からの命令がない。上官からの命令がないと動けない。それに、福島に向かう燃料が確保できない。」と言っていた。その時、何回か、隊長は無線でもどこかと連絡をとり、どうやら、県立医大へ向かう旨の命令が来ていないかなどを確認をしていたようだったが、無線での会話が終わると、■■■■に「やはり命令がない。」と言っていた。私も、阿部主任に、双葉病院等の患者をいわき市内で受け取れる病院はないのか確認したが、どこもいっぱいだと言われ、■■■■も、いわき開成病院以外のいわき市内の病院はどこも満杯だといった旨の話をしていた。

また、隊長は、バスは相双保健所を出て、福島に出て、福島西インターから高速に乗って、高速では50kmくらいの速度で走り、いわき中央インターでおり、ここに来たと言っていたと思う。途中、郡山には寄っていないのではないか。

その後、■■■■は菅野主査と連絡を取り、どうやら、双葉病院の患者を一時的に光洋高校に受入れ、県立南会津病院から医師を光洋高校に派遣するので、その医師が光洋高校に到着するまで、いわき開成病院の医師が患者を診ることになったらしく、■■■■は、「直ぐに戻ってくるので、一度いわき開成病院に戻って医者を連れてくる。」との旨私たちに伝えた後、いわき開成病院へ車で戻って行った。

■■■■が光洋高校を離れた直後、私は、何故か、隊長にいわき開成病院が受け入れられることとなった旨の連絡が入った旨聞いた。隊長は、■■■■からいわき開成病院では受け入れられない旨の話を聞いていたが、上官の命令であるということで、■■■■とともに、バス8台を連れて、いわき開成病院へ行ってしまった。私は、その時、学

【取扱い厳重注意】

校に毛布がなく、受入体制が整っていなかったことも、いわき開成病院へ向かった要因の一つなのではないかと思う。

4 光洋高校への受入れ

その後しばらくして、何故かまたバスが返ってきて、結局、光洋高校で双葉病院等の患者を受け入れることになり、自衛隊、私や吉田教頭、鈴木事務長、いわき開成病院から来た医師等4名、■■■■でバスから患者を搬出した。ちょうど、バスとほぼ同時に、いわき地方振興局（いわき市平字にある福島県庁の出先機関）シゲハラ主査とキクチ氏が、毛布と食料（水、おにぎり 2,000 個）を携えて光洋高校に現れたので、その2人も搬出を手伝ってくれた。

なお、福島県庁災害対策本部といわき地方振興局との間の連絡調整をしていたのは、企画商工部の鳴原孝之主幹であると思う。

バスから、保健室の担架やキャスター付きの机を使って患者を体育館へ運び、ブルーシートや畳の上に敷布団用に毛布を敷き、その上に患者を寝かせ、毛布をもう一枚かけた。毛布は、汚物で汚れたものも結構あったので、一人2枚程しかなかった。バスの中では、いわき開成病院の■■■■医師が患者の容態を診て、その時には、全員大丈夫だという話を聞いた。

また、光洋高校に患者を受入れることになったので、私は、阿部主査に連絡して、医療関係者の手配をお願いしたが、阿部主査からは、中々調整がつかない旨の返答があった。

搬出を開始して間もなく、自衛隊員が、「メルトダウンだ。体育館の中に避難しろ。」と言われたので、患者をバスの中に置き去りにしたまま、自衛隊も私たちも一度、全員体育館の中に避難した。その後しばらくして、さすがにバスに患者を置き去りにしたままにするわけにはいかないので、搬出を再開することになった。搬出作業再開後、まもなく、県立会津南病院で、DMAT メンバーでもある竹村医師、看護師2名、薬剤師1名の4名が来てくれて、患者達の容態を診てくれた。

また、搬出作業が終わる少し前に、阿部主査から連絡が入り、福島県警のバスで、南相馬市の小高赤坂病院の患者66名と医療スタッフ20名（医師は■■■■の他数名程度。）の86名が来るとの連絡が入ったので、受け入れる旨私は返答した。4時頃に搬出作業が終わり、しばらくして、小高赤坂病院の患者等が来た。最初、小高赤坂病院の■■■■は、「何で受入れの準備をしていないんだ。私たちが来るまで何やってたんだ。」と、鈴木事務長に食ってかかっていたが、ちょっと様子を見て、状況を察したらしく、すぐに落ち着いたが、私が、双葉病院等の患者の状況を説明すると、■■■■から「申し訳ないが、私の患者で手一杯なので、他の患者を診ることはできない。」言われた。その後、患者を体育館に誘導して、医療機器等を搬出した。赤坂病院の患者は、特に重篤な状況ではなかったと思う。

5 搬出作業終了後

搬出作業が終わり、落ち着いたのは15日4時頃だったと思う。搬送作業中に2名亡くなられ、竹村医師は、朝まで持たない患者も数名いると言っていた。このほか、搬送

【取扱い厳重注意】

後、同日午前中に12名が亡くなり、結局、合計14名が亡くなった。その後、
と 医師等いわき開成病院のスタッフは、当直明けで、2昼夜寝ていないのでひとまず帰りたいと言ってきたので、私は、おにぎりをあげて、等を帰した。その時、には、代わりの医者をお願いしたが、帰って相談してみるが、いわき開成病院も手一杯とのことだった。私は、いわき開成病院のスタッフには感謝している。

また、搬出作業が終わりしばらくした後、NHK から電話でインタビューを受けて、私は、搬出中に2名亡くなったことや、医療スタッフが4名しかいないこと、医療機器がほとんどない旨の説明した。その後、私は、少し仮眠をとった。どうやら、その時のインタビュー内容が、私が仮眠をとっていた間に報道されていたらしい。

15日朝方になって、から患者のための薬が欲しい旨依頼があったので、私は、阿部主査に電話して、から指示された薬を光洋高校へ持ってきてもらうことと、患者の転院先を手配するよう依頼した。も、携帯で、御自身の知り合いなどに患者の転院や薬の手配をお願いしていた。私は、双葉病院及びドーヴィル双葉と小高赤坂病院の医師等の対応があまりに対照的であったので、なおさら、双葉病院及びドーヴィル双葉の対応に怒りを覚えた。

また、同じ頃に、いわき地方振興局シゲハラ主査ともう一人の職員が私のところに来て、「このままでは灯油も物資もなくなる。いわき FM でボランティアを呼びかけたいが、許可してもらえないだろうか。放送内容は私たちの方で考える。」と言われたので、私は、シゲハラ主査等をお願いした。その他、私は、電話等でいくつかインタビューを申し込まれたが、「何でこんなことになったのか。」といったインタビューばかりだったので、NHK 以外は受けていないし、コミュニティー FM というラジオ局は聞いたこともない。

15日7時頃、双葉厚生病院の患者と他一般の避難者47名を乗せたバスが光洋高校に来た。バスには病院関係者は同乗していなかったが、患者は精神疾患患者が主の様であり、皆元気であった。バスの運転手からは、双葉厚生病院からバス3台で他の病院へ向かったが、2台分の患者しか受け入れてもらえず、残りは光洋高校に行けと言われたとのことだった。双葉厚生病院の患者は、自分で親類を呼び、帰って行った人も何人かいた。私は、双葉厚生病院の患者が避難してきた旨と転院先を探して欲しい旨、阿部主査をお願いした。

同日8時頃に、シゲハラ主査等がいわき FM で、光洋高校に双葉病院とドーヴィル双葉の患者が避難して来ているが、医師や灯油が不足している旨訴え、私もその放送をラジオで聞いた。その後、直ぐに反響があり、何人かの方が灯油を持ってきてくれたり、病院から看護婦ともう一人看護師が来てくれた。竹村医師は、15日朝頃に来てくれた光洋高校の事務職員10数名をまとめ、班編成して役割分担し、診断を進め、患者から名前を聞き出して、患者リストを作成してくれた。15日頃から、光洋高校に、双葉病院等の患者の親類から電話がたくさんきていたので、そのリストは大変役立った。

同日昼頃、竹村医師が南会津病院に帰らなければならなくなってしまったらしく、私は非常にショックを受けた。その時に、竹村医師ととの会話で、竹村医師が、小高赤坂病院の患者であれば、南会津病院に受入れることができると言われ、その後竹

【取扱い嚴重注意】

村医師等の調整を経て、小高赤坂病院の患者は南会津病院へ行くこととなった。小高赤坂病院の患者は、昼食をとった後、同日15時くらいに、14日に双葉病院等の患者を運んできたバス8台のうちの1台と、15日朝7時頃に双葉厚生病院の患者を運んできたバス1台を使って、自衛隊が南会津病院へと輸送したと記憶している。その時は、私は、自衛隊員が途中で燃料が確保できる旨言っていたと思うが、何故14日夜は双葉病院等の患者を福島に輸送できないと言っていたのに、その時は輸送できたのか、理由は知らないし、特段不思議には思わなかった。

その後、いわき開成病院から[]と看護婦が1名来たが、1時間程、死亡診断書を書いた後、双葉病院等の患者を診断することもなく、私の知らぬ間に帰ってしまった。その後、[]看護婦が呼んでくれたのであろう、[]病院の医師一人と看護師が数名来てくれた。医師は、しばらくして、他に行かなければならなくなったので、帰り、他の[]病院の看護師らは、同日深夜頃帰った。

16日朝、[]看護婦が、[]病院の勤務をなげうって、クビを覚悟で来てくれた。同日午後、ドーヴィル双葉の[]が、「本当に申し訳ない。」と泣きながら光洋高校に来た。その後、半日くらい一生懸命患者を診て回った後、「この状況は酷い。今後、この病院に勤めるか分からないけれども、この状況を訴えたい。」といて、帰っていったが、その後、光洋高校に来ることはなかった。

19日頃、既に双葉病院等の生きていた患者は全て転院が終わっていたが、この日初めて、鈴木院長が、[]と光洋高校に来た。鈴木院長は、来るのが遅れた弁明をしていたが、私には言い訳にしか聞こえなかった。しかし、気を取り直して、鈴木院長にまだ光洋高校に残っているご遺体の対応をお願いした。

6 その他

自衛隊の隊長は、どうやら群馬から来た人らしく、私は名前や所属を思い出すことができないが、その隊長が冷静に次々と指示を出し、陣頭指揮を執っていた姿を見て、非常に頼りになる隊長であると思った。私には、自衛隊は、非常に統率が取れた動きをしているように見えた。

[]は、14日夜の搬出を手伝うこともなく、搬出が始まってしばらくしたら「私の役目は道案内だけなので、タクシーを呼んで帰る。電話を貸して欲しい。」旨言ってきたので、私は学校の電話を[]に貸した。[]が携帯電話を持っていたかどうかは分からないが、固定電話を借りたいというくらいなので、携帯電話を持っていなかったのではないかと。その後、[]は、タクシーに乗って自宅に帰っていった。

私は、鈴木院長とは、以前から面識があった。以前、私が双葉高校の教頭をしている時、双葉高校野球部が県大会準決勝まで進み、準決勝会場が離れたところでやるので、[]である鈴木院長に、応援団を輸送するためのバスを1台手配してもらおうようお願いしたところ、鈴木院長から [] レンタルバス1台は7万円であるし、 []

